

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：99999
研究種目：奨励研究
研究期間：2023～2023
課題番号：23H05049
研究課題名 グローカル・シチズンシップ教育の試行的実践

研究代表者

若生 深雪 (WAKO, Miyuki)

仙台市立上杉山中学校・仙台市立中学校英語教員

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 460,000円

研究成果の概要：本研究は、中学校の教育課程にグローバル・シチズンシップの概念を取り入れ、中学生に地球市民としての自覚と、地域社会において積極的に社会に参画する素地を養うことを目的としていた。そのため、英語の授業では、海外の若者との交流を実施し、公民の授業では、現代的なローカルな課題について討論する場を設けた。生徒への質問紙や振り返りを分析した結果、授業の有効性が示された。目指す資質・能力を実生活と教科連携で相互に結び付ける手法を用いた授業は、中学生の学習意欲を高め、認知的・社会的能力の向上に寄与することが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の若者は、自己肯定感、社会への関与意識が低いとのデータが多数存在する。学校教育においては、不確実な将来に対応しながら逞しく生きる力を育むため、授業改善をはじめとする教育改革が実施されている。本研究は、その課題に真っ向から取り組んだものである。具体的には、若者に主権者教育、市民教育、国際教育の充実を図るために、教科連携モデル授業を提示した。この教育手法には、欧州の義務教育の指針とされている「相互文化的な民主的文化のための参照枠：RFCDC」を授業の目指す到達点とし、その成果を測る評価表として援用し、教育効果を確認したことは学術的な意義が大きい。

研究分野：グローバル・シティズンシップ教育

キーワード：中学校 グローカル・シチズンシップ 公民 現代的な課題 SDGs 異文化間交流 自己肯定感 民主的文化への能力の参照枠：RFCDC

1. 研究の目的

本研究の目的は、中学校で、グローバル・シチズンシップ（ローカルな繋がりとはグローバルなスキルの涵養を目指した市民性教育）の育成を目指し、試行的実践から教科横断型の教授法を構築することである。研究の概要は、2018年に欧州評議会が市民性育成の指針として発表した「民主的文化への能力の参照枠：Reference Framework of Competence of Democratic Culture（以下 RFCDC と略記）」を研究の核心にすえ、欧米諸国との比較で日本の若者に欠如している、自己効力感、主権者意識、そして論理的思考力を育成する挑戦的な実践を行う。そして、どのような授業が、どのような力を、どの程度育むのかを提示することを目的とする。

2. 研究成果

(1) 研究の手続き

具体的な実践フローは、(1)生徒の RFCDC の4領域の力（価値づけ、態度、スキル、知識と創造的な理解力）のレディネス調査、(2)結果に基づき「英語（国際教育）」、「道徳（多文化共生）」、「社会（主権者教育・人権教育）」の連携で、授業を立案、(3)教授法「philosophy for children (p4c)」を用いて3教科の指導法を関連付け、自己評価とポートフォリオで形成的評価を行いながら学習状況を把握、(4)インタビューとアンケートから質的・量的に実践を検証、である。

(2) 主な成果

実践の成果について以下6項目にまとめる。

- ① 3年生に指導する公民の学習は、RFCDC の「価値づけ：Value」の項目に相当する内容が多い。公民の領域に当たるこれらの項目に対し「これまで考えたこともなかった」と回答した割合が事後では大きく減少した(図1参照)。4領域の中でも「価値づけ：Value」のポイントの伸びが大きかった(図2参照)。
- ② 166項目のディスクリプター中、アンケート(4件法)の平均値が伸びた項目は、「悪いことをして訴えられた者でも、自分を守ることが許されるべきであるという考えを示す」が0.57、「私たちの権利を侵害するような公的機関の行為に対して、有効な手段があるはずであるという見方を主張する」が0.39、「異なる言語を使用した時、異なる場面でもつ効果について説明できる」が0.39上昇した。4領域全ての平均値が上昇した。
- ③ 「現代的な課題の議論」の授業アンケートでは、「関心がある」、「自分に関わりがある」、そして「議論の深まった」の三つの回答間に相関がみられた(図3参照)。
- ④ 海外とのオンラインやメールのやりとりは、公民で学習した身近な課題が世界でも同様に起こっていることだと想像し、視野を広げて世界と結びつけていた。多くの生徒の振り返りの自由記述から、グローバル・シチズンシップが育まれたことが確認された。
- ⑤ 事後インタビューから、以下のような生徒の意識変化があったことが分かった。
 - ・世界で起こっている問題が自分事のように考えることができるようになった。
 - ・私たちが作っていく未来はどんな未来かが分かった。
 - ・オンラインで海外の人とコミュニケーションをとることができたことはとても印象的に残っています。
 - ・将来のために必要な英語力はテストの点数ではなくて、外国の人たちと心を開いて話すことができる英語力です。
 - ・一人ひとりが協力しないと地球は破壊してしまう。努力するといいいことがあり、それが世界へつながっている。
- ⑥ 自己肯定感にあたるアンケート項目が上昇した。

(3) 今後の展望(まとめ)

教科連携により、効果的に目指す資質・能力を育成することができたと考えられる。さらに教育的価値を高めるには、公民を学習させる以前に社会問題について触れさせておき、身近な問題であるという意識を持たせておくことが重要である。これにより、公民学習での教育効果を高めることができる。自分の意見を堂々と話す能力は、海外の若者と交流する際に、有意義な対話を生む基盤となり、グローバル・シチズンシップのマインドを育成することにつながるであろう。

早い段階で社会問題に関与させ、海外の若者と直接的に接触させることが、変化の激しいグローバル社会に対応できる若者の育成につながる一案であると考えられる。

RF CDC-YL 166 descriptors descriptive statistics

Post n=119
Pre n=139

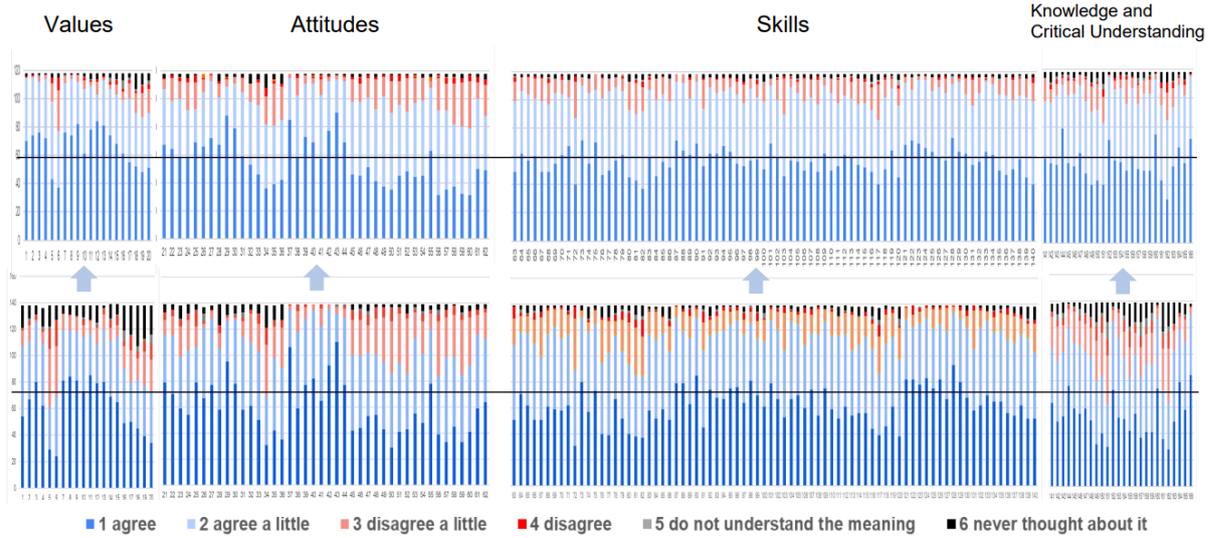


図1 166のディスクリプターに対する意識調査 事前と事後の比較

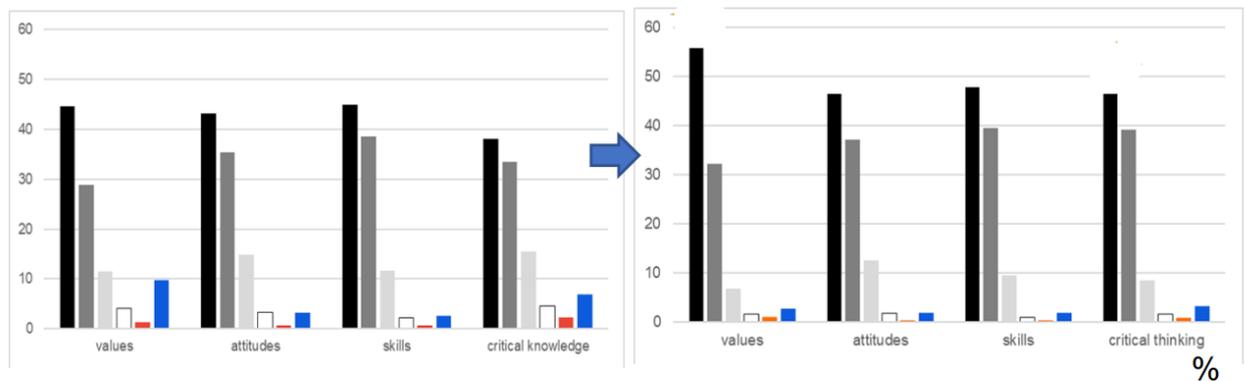


図2 領域別166ディスクリプター事前と事後の比較

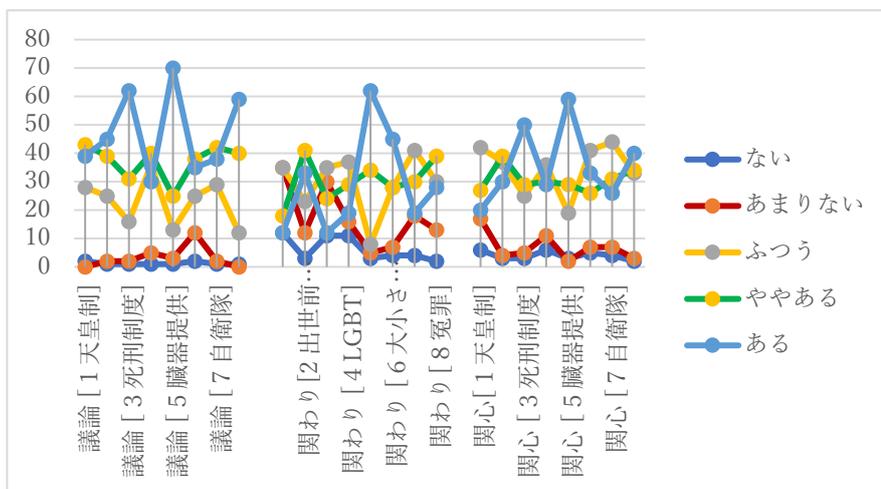


図3 「現代的な課題の議論」の授業の感想

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 9
2. 論文標題 アンネ・フランクから学ぶ人権	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際協働学習 iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 39-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 9
2. 論文標題 オンライン国際共修からの学び	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際協働学習 iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 41-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 9
2. 論文標題 ウクライナのリュウボブ先生とのオンライン授業	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際協働学習 iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 43-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 12
2. 論文標題 中学生のオンライン異文化間交流からの教育的効果（クリティカルシンキングに着目して）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 グローバル人材育成教育研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 9
2. 論文標題 知力と行動力を育む探究的な英語の授業	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際協働学習iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 45 - 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 10
2. 論文標題 中学生の世界を広げるCOIL型教育の展望 -GOMI on ERATHのプロジェクトから-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国際協働学習iEARNレポート	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若生深雪	4. 巻 72
2. 論文標題 我が国におけるグローバル・シティズンシップ教育 その現状と今後の展望	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北大学大学院教育学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 123 144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 若生深雪
2. 発表標題 中学3年間の英語の授業を通しての成長 シチズンシップに着目してー
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 若生深雪
2. 発表標題 GOMI on EARTH プロジェクト 知力と行動力を育む実践
3. 学会等名 NPO法人グローバルプロジェクト推進機構(JEARN)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miyuki WAKO
2. 発表標題 Exploring Japanese adolescents' awareness of intercultural citizenship in studying SDGs
3. 学会等名 CULTNET Annual Meeting
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 若生深雪
2. 発表標題 中学生の世界を広げるCOIL型教育の展望 -GOMI on ERATHのプロジェクトから-
3. 学会等名 NPO法人グローバルプロジェクト推進機構(JEARN)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------